

論文審査の要旨  
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 ( 文学 ) Ph.D.	氏名 (Candidate Name)	張 淑君
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目 (Title of Dissertation) 日本における梁啓超像に関する研究			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主 査 (Name of the Committee Chair)	准教授	陳 翀	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授	小川 恒男	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授	川島 優子	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授	有元 伸子	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授	呉 紅華 (九州産業大学)	
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>本論文は、ジャーナリスト、政治家、学者として活躍し、近代中国の知の巨匠とも称され、戊戌変法（1897年11月）の後に長く日本に亡命した梁啓超（1873－1929）の日本における文化活動やその評価について考察を加えたものである。全体は、序章、第一部、第二部、終章と資料篇の五つの部分に大きく分かれる。</p> <p>第一部では新たな資料も取り入れつつ、主に来日前後の梁啓超の西洋学に対する理解、日本亡命と放逐の経緯、及びこの時期の著作の出版、の三点から三章に分けて考察を行った。第一章では、梁啓超が来日以前及び来日直後に著した「西学書目表」「東藉月旦」等に注目し、これらの著作の時代背景、創作意図、内容などに関する考察を通じて、梁啓超における西洋の学問とはどのようなものだったのか、西洋学に対する彼の理解は来日によってどのように変化したのかを究明した。第二章では、早稲田大学図書館蔵「大隈重信関係文書」の中の梁啓超関連資料や日本国立公文書館に保存されている公文書及び個人的な回想文などを解読して考察を加え、梁啓超の日本亡命と放逐の経緯をより詳しく解明した。第三章では、『壬寅新民叢報彙編』『飲氷室文集類編』両書の出版及び編者に注目し、来日初期の梁啓超著作物の影響や出版状況の新たな一面を明らかにした。</p> <p>第二部では、近代の日中の文人の目から見た梁啓超像、戦前の新聞に見られる梁啓超像、及び一九二〇年代の日中学術交流史における梁啓超の位置づけ、の三点から三章に分けて考察を行った。第四章では、晩年の梁啓超及びその学術論著が日中の近代文人から受けた評価を検討することで、明治文人の目から見た梁啓超像を明らかにした。第五章では、明治期から戦前までの『朝日新聞』『読売新聞』における梁啓超関連の資料を収集して考察を加えることで、戦前までの日本のメディアが梁啓超をどのように報じていたかを明らかにし、日本の新聞に見られる梁啓超像をより立体的に解明した。第六章では、『清代学術概論』及びその日本語の訳本を紐帯とし、梁啓超と訳者橋川時雄との交際に検討を加え、一九二〇年代の日中学術交流史における梁啓超の位置づけや日本の学術界との関わり、日中両国の学術界の様相などを明らかにした。</p> <p>終章では、各章の内容をまとめ、改めて梁啓超の東アジア文化史上における位置づけを行った。さらに、梁啓超に限らず、彼のような時代の変わり目において活躍した知識人たちの歴史上における位置づけや影響を検討する際、中国本土の資料だけでなく、海外の資料をも視野に入れて、より広い視点から研究を行う必要があることを指摘した。</p> <p>資料篇では、明治期から戦前までの『朝日新聞』と『読売新聞』における梁啓超関連の記事を収集して</p>			

整理することで、梁啓超研究における該当分野の空白を埋めた。

本論文は、資料の解説や論考の方法にやや不十分な点もみられるが、梁啓超研究や今後の清末民初の知識人に関する研究に資する重要な研究として高く評価できる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考 要旨は、1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)